第２回高校生の登山のあり方等に関する検討委員会資料

２０２０年2月１７日
作成：佐藤政充

高校山岳部は他の運動部とは違い、山域での活動のため、道迷い、転倒、滑落、集中豪雨、落雷、火山噴火など起こりうるたくさんのリスクや、読図、気象知識、雪崩の知識など、引率者は相当なスキルと知識がなければ部員を危険に晒してしまう運動部としては特異性を持った運動部です。

那須雪崩事故は、人為発生の可能性が高いと専門家グループの調査報告書にもある通り、私は「人災」だと思っております。登山歴３０年を超えるベテランの顧問でも事故を起こしました。本来、登山とは山を楽しむものであると考えます。事故が起きた背景の一つとして、登山の競技性による競争意識や顧問の技量があると思います。栃木県高体連登山専門部のこれまでの対応と、責任を取っていないことを考えると、高校の山岳部は無くても良いと思っています。

今後も山岳部としての活動を続けるのであれば、安全性の追求と責任が取れるシステム作りが必要です。登山大会での競技性（特にタイム計測）の排除、山岳部顧問の問題について、以下の通り提案いたします。

１．登山大会での競技性の排除について

高校生の登山競技は、安全登山に必要な技術及び体力の定着といった観点から実施され、体力、歩行技術、装備、設営・撤収、炊事、天気図、自然観察、救急、気象、記録・計画、読図、マナーの各項目で審査されているようですが、特に体力についての点数配分が高く、登山のスピードを競うことが勝敗を分けているのが現状だと考えます。無理してでも速くゴールしたパーティが、高得点となることが果たして安全登山といえるのでしょうか。コースには適正タイムがあると思います。その日の天候や、コースの込み具合を考慮して登山することのほうが安全登山と言えるのではないでしょうか。

また、那須雪崩事故は安全第一の意識よりも競争意識から危険性の高い斜面へと踏み込んでしまったことが原因と考えています。今後も登山大会を開催するのであれば、スピード競技を完全に排除し、安全登山に必要な技術に限定するべきです。

２．山岳部顧問について

部活動としての登山が特殊であることから、登山経験の少ない顧問歴５年未満の顧問が多く、知識不足や経験不足は否めません。技術的に指導できず不安を抱いている顧問も少なくないと思いますし、山岳部の顧問を望んでやっているのか甚だ疑問です。

現在、山岳部が登山する場合は、学校が計画し登山審査会の審査を経て、登山アドバイザーを帯同させ実施することとなっておりますが、今後は部活動指導員の制度を利用し、山岳部の顧問を外部の専門家「部活動指導員」に依頼し、担当教諭は連携・協力する体制にすることが望ましいと考え、提案いたします。

また、競技性を持つ登山活動については高校の部活動としてはせず、スポーツ少年団等のクラブチームで活動することが望ましいと考えます。

現時点での体制

顧問（教諭）：登山の計画立案、引率

登山アドバイザー：登山帯同時の技術指導、安全確保

※専門知識を持たない教員が顧問を務めるケースが多く、専門研修への参加や技術指導など教員への負担が大きい。また、登山引率時の責任者は顧問である教諭であり、登山アドバイザーではない。

提案する体制

顧問（部活動指導員）：計画立案、引率、技術指導、担当教諭との連携

教諭（山岳部担当）：部活動指導員に協力、日常的な指導

※専門的な知識がある部活動指導員が顧問となることで、質の高い指導ができる。また、教諭の負担が軽減されるとともに専門知識が無くても部活動担当ができる。

以上